

# 不登校の訪問臨床における訪問者の役割と課題

Roles and Tasks of the Visitor in Visiting Psychological Support  
for Children of Non-Attendance at School

吉 井 健 治

YOSHII Kenji

鳴門教育大学学校教育研究紀要

第 36 号

Bulletin of Center for Collaboration in Community

Naruto University of Education

No.36, Feb, 2022

## 不登校の訪問臨床における訪問者の役割と課題

Roles and Tasks of the Visitor in Visiting Psychological Support  
for Children of Non-Attendance at School

吉井 健治

〒772-8502 鳴門市鳴門町高島字中島 748 番地 鳴門教育大学

YOSHII Kenji

Naruto University of Education

748 Nakajima, Takashima, Naruto-cho, Naruto-shi, 772-8502, Japan

**抄録：**本論文の目的は、不登校の訪問臨床における訪問者の役割と課題について明らかにすることである。訪問者には多様な役割がある。これらの役割のうちで最も重要なのは、訪問者が子どもたちとの人間関係づくりを行う心理発達の役割である。筆者は、訪問者の心理発達の役割の基本的な要因として8つを説明した。また、訪問者が抱えている3つのタイプの課題（悩み）、つまり、訪問者の役割上の悩み、訪問者の心理面の悩み、訪問の構造に関する悩みについて述べた。最後に、大学院生の訪問者の経験と成長、そして研修とスーパーヴィジョンについて述べた。

**キーワード：**不登校、訪問臨床、訪問者

**Abstract：** The purpose of this paper is to clarify roles and tasks of the visitor in visiting psychological support for children of non-attendance at school. Visitors have a variety of roles. The most important of these roles is the psychological developmental role in which the visitor builds relationships with the children. The author explained eight basic factors of the psychological developmental role of visitors. The author also described three types of issues (worries) that visitors have: worries about the role of the visitor, worries about the psychological aspects of the visitor, and worries about the structure of visiting psychological support. Finally, the author described the experience and growth, training and supervision of the graduate student visitors.

**Keywords：** non attendance at school, visiting psychological support, visitors

## I. はじめに

ひきこもり傾向の不登校の子どもを対象とした「訪問臨床」は、不登校対策事業の1つとして、教育委員会と大学の連携のもとで実施されている。訪問者は、臨床心理士養成及び公認心理師養成の大学院生である。大学院生は、実習として取り組み、定期的に大学教員からスーパーヴィジョンを受け、大学内で開催される訪問臨床事例検討会に参加している。訪問は、原則として週1回、60分間である。訪問回数数の制限はないが、年度末で一旦終了し、年度ごとの申請となる。訪問を受ける家庭の費用は無料である。筆者は、本事業が始まった2002年度から運営協力者、訪問臨床事例検討会の講師、訪問者のスーパーヴァイザーを務めてきた。筆者はこれまで訪問臨床に関する研究論文を発表してきた（吉井、2013, 2014, 2016, 2020）。

なお、訪問臨床の定義は以下の通りである（吉井、2013）。訪問臨床とは、臨床心理士およびこれに準ずる

者である訪問者が、対象者の家庭を訪問し、対象者およびその家族に対して、一定のアセスメント（状況・状態像・要求などの把握）に基づいて、訪問の構造（時間、場所、関係性、活動内容、安全性など）を調整しながら、臨床心理学的支援を行うことである。

そこで本論文の目的は、筆者の訪問臨床に関する教育研究の経験に基づいて、第1に訪問者の心理発達の役割の基本的要因を明らかにすること、第2に訪問者の課題における心理面の悩み及び訪問の構造に関する悩みについて明らかにすることである。

本文の構成は以下のとおりである。

## II. 訪問者の多様な役割

1. 訪問者の多様な役割
2. 心理発達の役割の重要性

## III. 訪問者の心理発達の役割の基本的要因

1. 安心感の提供
2. ヨコの関係
3. ねぎらうこと・ほめること

4. ニーズに応えること
5. 揺さぶること
6. 自己開示
7. モデルとなること
8. バランス感覚

#### IV. 訪問者の課題

1. 訪問者の役割上の悩み
2. 訪問者の心理面の悩み
  - 1) 子どもの退行的、依存的な態度に呑み込まれる
  - 2) 子どもの攻撃的、自己愛的な態度に揺さぶられる
  - 3) 子どもに同情的になり過剰サービスする
  - 4) 達成感も充実感も得られないで無力感を感じる
  - 5) 一歩踏み込むのは怖い
3. 訪問の構造に関する悩み
  - 1) 時間が守られにくい
  - 2) 外出をしてもよいのか
  - 3) 家族との関係のもち方はどうすればよいのか
  - 4) 関係者に子どもの様子をどこまで伝えるのか
  - 5) 活動内容がマンネリ化している
  - 6) 品物をもらってもよいのかどうか

#### V. 訪問者の経験と成長

1. 訪問者の学び・気づき
2. 訪問者自身の成長
3. 訪問者に対する研修とスーパーヴィジョンの必要性

## II. 訪問者の多様な役割

### 1. 訪問者の多様な役割

ひきこもり傾向の不登校児童生徒の家庭を訪問する訪問者にはどのような役割が求められているのか。

緒方(1994)は、家庭教師的役割、心理発達の役割、心理療法的役割、家族療法的役割の4つのカテゴリーを挙げている。また倉島(1999)は、心理発達の役割、心理療法的役割、家族療法的役割の3つは緒方(1994)と同じだが、興味関心等を広げる活動生活療法的役割、他の社会資源の情報提供や連携を行う社会・ネットワーク療法的役割の2つを加えた5つのカテゴリーを挙げている。ただし、活動生活療法的役割(倉島)は、子どもの学びや体験を促進させる関わりなので家庭教師的役割(緒方)に含めることができる。また、社会・ネットワーク療法的役割(倉島)は、子どもを社会につなげていく関わりなので心理療法的役割(緒方)に含めることができる。以上のことから、訪問者の役割は、緒方(1994)が提示したように、家庭教師的役割、心理発達の役割、心理療法的役割、家族療法的役割の4つのカテゴリーに分類される。

家庭教師的役割は、子どもの学習や進路に関する支援を行うことである。学習内容を教えるだけでなく、勉

強への動機づけを高めたり、勉強への苦手意識を改善したり、学習スタイルに応じた勉強の仕方を示したりする。また、子どもの好奇心を引き出したり、子どもに達成感をもたせたりなどして、子どもが主体的に自分の進路を考えて人生に希望を抱けるように支援する。

心理発達の役割は、子どもの心理発達の促進を行うことである。子どもが安心感を抱いて一緒に楽しめるような人間関係を築くことである。次に、子どもが訪問者を尊敬したり憧れたりなどして自分もそうなりたいと思うような同一化のモデルになる。

心理療法的役割は、子どもの気持ちを和らげたり問題解決の支援を行うことである。心が傷ついたり悩みを抱えていたりする子どもの話を聴いてあげる。また、子どもと一緒に様々な表現活動を行う中で、押し込められていた感情を解放することによって元気を回復するように働きかける。また、学校、適応指導教室、スクールカウンセラー、専門相談機関などと連携したりする。

家族療法的役割は、訪問者が定期的に家庭を訪問することによって家族に変化をもたらすことである。訪問者の言動は、家族関係に影響を与えたり変化を起こしたりする。緒方(1994)は、保護者が、訪問によって「家族間の会話が増えた」「家庭内の雰囲気良かった」と感じていることを明らかにした。なお、訪問者は、意図的に家族療法を実施しているのではないのだが、結果的にこのような効果が得られるという意味である。

### 2. 心理発達の役割の重要性

訪問者の役割には、家庭教師的役割、心理発達の役割、心理療法的役割、家族療法的役割の4つがあることを示したが、これらのうち心理発達の役割は重要である。

伊藤(1999)の研究では、メンタルフレンド事業における全国の児童相談所に対する調査で81か所からの回答を得た。児童相談所職員が考える「MFに求める資質」(11項目)で高かったのは「1位:親しみやすさ」「2位:子どもへの関心」「3位:受容性」であり、反対に最も低かったのは「11位:専門知識」だった。このようにMFには、臨床心理の専門性よりも、親しみやすく、子どもに関心をもって、受容的に接してくれる資質が求められていた。また、「MFに期待すること」(9項目)で高かったのは、「1位:親しく楽しい人間関係」「2位:安心できる人間関係の体験」「3位:人間関係の広がり」だった。不登校児童生徒は人との関わりが苦手だったり友人関係で傷ついたりすることが多いので、MFと人間関係づくりの練習を行うことが期待されていた。反対に低かったのは、「7位:学校復帰」「8位:勉学面のサポート」「9位:家族関係の改善」だった。MFは子どもと関わる役割なので、家族関係の改善のために働きかけることは期待されていなかった。また、勉強のサポー

トや学校復帰に向けた働きかけも期待されていなかった。

酒井・伊藤（2001）の研究でも、全国の児童相談所119か所からの回答（回収率68.0%）が得られたが、児童相談所職員が考える「MFに求める資質」及び「MFに期待すること」の結果は、前述した伊藤（1999）の結果とほとんど同じだった。

以上のことから、訪問者には人間関係づくり、つまり心理発達の役割が求められていることが明らかとなった。心理発達の役割は、子どもと訪問者の関わりが開始されるための必要条件である。これがなくては何も始まらない。家に引きこもって他者との交流を回避している子どもが心を開くためには、訪問者に対して子どもが安心感をもって一緒に楽しめるという関わりが必要不可欠なのである。また、心理発達の役割は子どもと訪問者の関わりが進展していく際にも重要である。子どもにとって訪問者の存在は、同一化モデルだけではなく、チャム、分身自己対象、ニューオブジェクトという意味でも重要な存在なのである。

### Ⅲ. 訪問者の心理発達の役割の基本的要因

訪問者には、心理発達の役割が求められていることが明らかとなった。それでは、その役割はどのような要因から構成されているのだろうか。筆者の訪問臨床に関する

表1. 訪問者の心理発達の役割の基本的要因

1. 安心感の提供 子どもは対人関係で傷ついた経験があり、人に対して警戒心をもっている。そこで、何を話しても大丈夫、自分は認められているという安心感をもつことが必要である。
2. ヨコの関係 訪問者は、子どもの目線に立って、気楽な友だち的な付き合いを心がける。大人やカウンセラーの視点から見たり対応したりするのではなく、対等な立場で交流する。
3. ねぎらうこと・ほめること 訪問者との面会に抵抗感をもちながらも一歩を踏み出したことに対して「頑張ったね。会えてうれしい」とねぎらう。また、自尊心が低下しているのでほめる。
4. ニーズに応えること 子どもは「話を聞いてほしい」「一緒に楽しみたい」「甘えたい」など様々な欲求をもつ。こうした欲求に訪問者が応じることによって、子どもは元気を回復していく。
5. 揺さぶること 子どもは、自分の考えや気持ちを打ち明けたくても簡単には出せない。そこで訪問者は、こうした抵抗感を理解した上で、過剰な不安を与えない程度に揺さぶる。
6. 自己開示 訪問者が自身の経験を率直に語ることによって、子どもは訪問者に対して親しみやつながりを感じ、子どもも自己開示をしやすくなる（自己開示の返報性）。
7. モデルとなること 子どもが憧れを抱いたり、考え方や価値観を取り入れたりするような同一化の対象となることである。友人的な部分と大人の部分を統合した「ななめの関係」である。
8. バランス感覚 訪問者は、子どもの主体性を尊重しながら受け身的に関わる。同時に、消極的な子どもに対して、脅威を与えない程度にリードしていく関わりも必要である。

る教育研究の経験に基づいて以下8点について述べることにする（表1）。

#### 1. 安心感の提供

子どもは対人関係で傷ついた経験があり、人に対して警戒心をもっている。また、子どもは対人関係で不信感を抱いた経験があり、人に対して不信感をもっている。そのため、新しい出会いにおいても、再び自分が傷つけられるのではないかと警戒心を抱いたり、「分かってくれはるはずがない」と不信感を抱いたりする。しかし、本当は、人と親しく交流したい気持ち、人を信じたい気持ちをもっている。

こうした葛藤を抱えている子どもとの関係づくりのためには、どのようなことが必要なのだろうか。それは安心感である。子どもが「この人には何を話しても大丈夫」「この人といると楽な気持ちで過ごせる」「この人は私を受け入れ認めてくれる」と感じられることである。そこで訪問者は、様々な工夫をして子どもに安心感を提供することが重要である。

具体的にはどのようにすればよいのだろうか。テーブルゲーム（トランプ、人生ゲーム等）、テレビゲームやコンピュータゲーム、イラストや工作等の創作的遊び等と一緒に楽しむことである。その際に、子どものニーズに応じた活動を行うのが基本である。訪問者は「一緒にしてみたいことは？」と子どもの興味・関心を尋ねてみる。村瀬（1979）は、「どのチャンネルを使うと子どもと接点があるのか、子どもの好きなこと、関心をもてることは何なのか」と訪問者は考え、親しみのある関係づくりを行って警戒心を解くことの重要性を指摘している。

人に対して警戒心や不信感をもっている子どもの心を開くためには、教師やカウンセラーよりも年齢のちかい兄弟的な存在が有効である。伊藤（2001）は、不登校児童生徒には大人への拒否感や治療的な関わりへの抵抗をもっている者や、友人という存在を求める者が多いことから、年齢の近いメンタルフレンドは子どもが警戒せずに会い、人間関係を体験できるという点で有効であるという。

#### 2. ヨコの関係

支援者と被支援者の関係のあり方にはタテの関係・ヨコの関係・ななめの関係があるが、訪問においてはヨコの関係が重要である。ヨコの関係とは、換言すれば、友だち的な関係、対等な関係のことである。しかし、ヨコの関係には、立場や年齢が近いことが必ずしも必要だとは言えない。教師やカウンセラーは子どもに対して主としてタテの関係で関わっているのだが、状況によってはヨコの関係やななめの関係で関わることもある。このよ



うに、ヨコの関係は支援者の立場・年齢にかかわらず生じる。

武井・富樫・長野（1999）は、訪問者には「素人っぽさ」「子どもと同じ高さの目線で物事を見たり感じたりできること」が必要であるという。そして、こうした訪問者との関わりを通して、子どもは自分の本音を素直に出せるようになり、これまで抑えられていた感情を表現できるようになると述べている。また、伊藤（2001）は、児童相談所でMF活動経験のある152名の回答を分析した。「MFの関わり尺度」（15項目）では、「子どもの意思や主体性を尊重する」「気楽な友だちづきあいを心がける」「子どもと対等につき合うよう心がける」の平均値が比較的高かった。反対に、「心理治療の一環という自覚を持つ」「子どものお手本となるようつとめる」の平均値が比較的低かった。このことから訪問者は、カウンセラー的関わりや教師的関わりではなく、対等な立場で気楽な友だち感覚で関わっていきこうというヨコの関係の姿勢をもっていることが明らかにされた。

なお、吉井（2020）は、ヨコの関係の本質的な意味について「チャム」（Sullivan, 1953）や「分身自己対象」（Kohut, 1984）の概念をもとに説明している。

### 3. ねぎらうこと・ほめること

訪問者は本人と顔を合わせることができたら、「会えて良かった。思い切って出てきてくれてありがとう」とねぎらいの言葉をかけるようにする。子どもは抵抗感もちながらも勇気をふりしぼって一歩前進してくれたのであり、訪問者はこうした苦労や頑張りを理解し感謝するのである。

子どもは、長い間学校に行けないで引きこもっているので、自尊心が非常に低くなっている。そこで、訪問者は積極的に子どもの良いところを見つけてほめてあげることが大事である。ただし、上から目線の雰囲気や評価的な態度をとらないように注意しなければならない。子どもは、訪問者の眼差しや言葉の抑揚から、ほめ言葉に嘘がないかどうか、本気かどうかを直感的に見抜ける力がある。訪問者の愛情の込められた言葉は、自尊心の低下している子どもの心に深く染みていくのである。

### 4. ニーズに応えること

学校に行かないで家の中で孤独に過ごしてきた子どもは、訪問者と出会って、「一緒に遊びたい」「好きなことや趣味の話で盛り上がりたい」など楽しい交流への期待をもつようになる。また、「友人関係で傷ついた気持ちを聞いてほしい」「家族に対する不満を聞いてほしい」「自分のコンプレックスを分かち合いたい」などの心理的理解を求めるようになる。こうしたニーズに訪問者が応えることによって、子どもはしだいに元気を回復していく

ことができる。訪問者は、子どもにどのようなニーズがあるのかを見極め、そのニーズをよく理解した上で対応していくことが重要である。

そうすると子どもは、これまで得られなかった経験を訪問者というニューオブジェクト（new object）から得られるようになる。ニューオブジェクトについて乾（2009）は、「治療者は父母とは違った発達促進的な新しい対象になるものというもので、外的な現実の存在としても、内的な発達促進的な役割を果たす」と述べている。

このように、訪問者がニューオブジェクトとして子どものニーズに応えることによって、子どもの心理発達の促進を図ることができる。

### 5. 揺さぶること

訪問の活動内容が、いつも同じようなパターン、たとえばゲームの話やアニメの話などに固定化してしまうことがある。それは子どもにとって楽しいことは確かだが、数ヶ月間も続くと退屈な雰囲気になったり、大事なことに向き合うことを回避しているようなことになったりする。訪問者自身、関係性を深めていきたいと思いつつも、現状の楽しい関係を壊すかもしれないと危惧して踏み込めないでいる。こうした停滞が起こった時、どのように揺さぶるとよいのだろうか。

子どもは訪問者に対して自分の考えや気持ちを打ち明けたくても簡単には出せないものである。それは、打ち明ける勇気が出てこなかったり、自分の否定的な面を見せたくなかったり、相手にどう思われるかが気になったりするからである。そこで訪問者は、「もし悩んでいることや困っていることがあれば何でも話してほしい」と、子どもが打ち明けやすくなるように促すことが大切である。また訪問者は、人に相談することや人に助けを求めることに対して抵抗感を感じるのは自然なことであると説明してあげるとよい。さらに、子どもが誰かに相談した経験を尋ねて、相談して良かったという気持ちや反対に満たされなかった気持ちを語ってもらうのもよい。そして、子どもが自分の考えや気持ちを話してくれた時には、訪問者は「思い切って話してくれてありがとう」「率直に話してくれて気持ちがよく分かるようになった」と肯定的に受けとめてあげることが重要である。

子どもと訪問者との間で楽しい会話や交流がなされることは関係性の基礎づくりとしては必要不可欠だが、そこにとどまるだけでは関係性の発展は進まないで、子どもも訪問者ももの足りなさを感じる。こうしたとき訪問者は、子どもに過剰な不安を与えない程度に揺さぶることが必要である。これにより、子どもは人に相談し助けを求めた経験を得て、SOSが出せること、つまり援助要請ができるようになっていくのである。

## 6. 自己開示

子どもの考えや気持ちを引き出そうと試みても、子どもはなかなか自分を率直には見せてくれないことがある。こうしたとき、訪問者自身の自己開示が効果的である。つまり、訪問者が自己開示をすると子どもも自己開示をしやすくなるという自己開示の返報性が働くのである。

訪問者の中には、友人関係で傷ついた経験をもつ者がいたり不登校経験をもつ者がいたり家族関係で悩んだりした者がいる。こうした訪問者の経験は、とっておきの有力な手段である「切り札」となる。訪問者がこうした経験を率直に語ることによって、子どもは似たような経験をもつ訪問者に対して驚きと同時に親しみやつながりを感じる。そうすると子どもは、訪問者をモデルとして率直に自分を見せようとする。

訪問者の深い自己開示はタイミングが重要である。言い換えれば、いつ「切り札」を出すのが効果的かということである。出会って間もない頃だと驚きの方が強くなってしまい、子どもは訪問者に対して心理的な距離をとってしまう。適切なタイミングは、子どもが自分の否定的な経験を打ち明けたいと感じながらも、あと少しの勇気が出てこないときである。このようなときこそ訪問者の自己開示は子どもの気持ちの後押しとなる。こうして、訪問者の適時適量の自己開示によって、子どもの内面における固く閉ざされていた蓋が開いて否定的な記憶や感情が流れ出してくるようになり、子どもは解消や解決に向かって歩み始めるのである。

## 7. モデルとなること

子どもは、訪問者の言葉遣いや態度を模倣したり、訪問者を理想化して憧れを抱いたり、訪問者の考え方や価値観を取り入れたりする。このように、訪問者は子どものモデルとなる。子どもと訪問者の関係性が「ヨコの関係」(友人的)と「タテの関係」(大人の)の両方をもっている「ななめの関係」であるからこそ、同一化が起こりやすいのである。

武井ら(1999)は、子どもは訪問者のもつ考え方や価値観を自然に吸収しながら、学校や社会に向かって再び踏み出す勇気や力を獲得していくと述べている。子どもは、自分を応援してくれる訪問者を力強いモデルとして取り入れ、現実に向かって歩み始めるのである。

## 8. バランス感覚

訪問の枠組みは、施設等への来談の枠組みと比べると非常に緩やかである。つまり、訪問の枠組みでは、時間や場所が厳密に決まっていなかったり、活動内容に多様性があったり、支援者と被支援者の関係性(友だち的、カウンセラー的など)が変動したりする。こうした柔構

造(岡野, 2008)の訪問では、訪問者のバランス感覚が必要とされる。

一つは、訪問者には受動的関わりと能動的関わりとのバランス感覚が求められる。受動的関わりとは、子どもの出方を待って受け身的に対応することであり、子どもの主体性を尊重することである。一方、能動的関わりとは、子どもをリードすることであり、子どもの成長を促進することである。たとえば、子どもに積極的に話しかけたり楽しい活動に誘ったりして、子どもの気持ちを開放させ意欲を引き出すことである。しかし、子どもが顔を見せてくれないからといって子どもの部屋にずかずか入っていくことはしない。能動的関わりにおいては、子どもに脅威を与えないように注意しなければならない。以上のことから、訪問者は、受動的関わりを基本としながら適度な能動的関わりを行うというバランス感覚が必要とされる。田嶋(2001)の「節度ある押しつけがまさ」という言葉は、受動的関わりと能動的関わりとのバランスを端的に表現している。

もう一つは、訪問者には「つかず離れず」、あるいは「不即不離」というバランス感覚が求められる。訪問者は、家庭の中に入ることによって子どもとの心理的距離が近くなり過ぎることがあるので注意しなければならない。他方、訪問者が大人の、教師的、カウンセラー的な態度を取って水くさい関係になってしまい、子どもとの心理的距離が遠くなり過ぎるのは訪問の意味が薄くなってしまふ。つまり、訪問者は、子どもに近づき過ぎないで、かといって離れ過ぎないで、一定の距離を保ちながら関わり続けていくことが必要である。

## IV. 訪問者の課題

訪問者はどのような課題(悩み)を抱えているのだろうか。伊藤(2001)は、児童相談所でMF活動経験のある152名の回答を分析し、「MFの悩み尺度」(12項目)において役割上の迷い、孤立・負担感、枠破りの不安といった3因子を抽出した。役割上の迷い因子には「自分が役に立っているのかわからなくなった」等があり、訪問者の役割上の悩みが示されていた。孤立・負担感因子には「子どもを一人で背負っているような負担を感じた」等があり、訪問者の心理面の悩みが示されていた。枠破りの不安因子には「活動時間外に子どもやその家族が連絡を取ってきた」等があり、訪問の構造に関する悩みが示されていた。そこで以下では、訪問者の役割上の悩み、訪問者の心理面の悩み、訪問の構造に関する悩みの3つに分けて検討する。

### 1. 訪問者の役割上の悩み

訪問者の役割上の悩みについて、調査研究では次のよ

うな結果が示されている。緒方・川口・小松（1994）では、訪問者13人を対象に訪問に関する自身の精神的苦痛について尋ねたところ5人（39%）が苦痛を感じていた（5件法で「かなり苦痛」「やや苦痛」と回答した者）。子どもと保護者のほとんどが訪問者の来訪を楽しみにしていたにもかかわらず訪問者自身は負担を感じていたのは、訪問者が周囲の期待に応えなければいけないと強く感じていたからだと考えられた。また、伊藤（2001）の「MFの悩み尺度」（12項目）で平均値が高かった項目は「自分が役に立っているのかわからなくなった」「自分の取るべき役割がわからなくなった」「子どもの問題にどの程度触れてよいのか悩んだ」「活動がマンネリ化した」といった役割上の悩みだった。また、酒井・伊藤（2001）では、MFの役割に関する問題点として「児童の親がMFに対して本来の趣旨と異なる役割を期待する」（79.3%）、「MFが児童の問題に巻き込まれる」（65.7%）があり、訪問者は周囲の期待を背負いながら自分の役割に悩んでいる様子が伺えた。

訪問者に対して親や教師は様々な期待を寄せている。親は子どもの学習面の遅れを補ってほしいと期待していたり、教師は子どもの登校意欲を引き出してほしいと期待していたりする。しかし、訪問者は学習指導を中心とする家庭教師でもないし登校を促す役割でもない。前述したように、訪問者の本来的な役割は、引きこもり傾向の不登校の子どもとの人間的なつながりを形成し維持し発展させる心理発達の役割である。したがって、訪問者の役割上の悩みの背景には、訪問者が親や教師の様々な期待を敏感に感じ取り、過剰なプレッシャーとなっていることが明らかとなった。

## 2. 訪問者の心理面の悩み

訪問者は、子どもとの関わりの中で感情を揺さぶられ、心理面の悩みを抱えることがある。

### 1) 子どもの退行的、依存的な態度に呑み込まれる

子どもは家庭という慣れ親しんだ場にいるので、自分のペースで気楽に過ごすことができ退行的になる。そして、子どもは訪問者に慣れてくるにつれ、甘えたり要求したりして依存的になる。訪問者は、最初はこうした退行的、依存的な態度を許容しているが、だんだんエスカレートしていくと子どものペースに呑み込まれるのではないかと悩むことがある。

### 2) 子どもの攻撃的、自己愛的な態度に揺さぶられる

ある子どもは、訪問者があまり知らない対戦ゲームをすることになって、相手の弱さにつけ込んで一方的に攻め、自分が勝ったことを大喜びすることがあった。訪問者は、一緒に楽しむ気持ちにはなれず、腹が立ったり気分が沈んでしまったりした。どうして子どもは攻撃的、自己愛的な態度を取ったのだろうか。子どもは日頃から

友だちに対しても同じように振る舞っているのかもしれない。あるいは、過去に自分が友だちから受けた仕打ちや心の傷をいま訪問者に向かって再現しているのかもしれない。訪問者は、子どもの気持ちの受容・共感に努めているのだが、こうした攻撃的、自己愛的な態度に接すると気持ちが大きく揺さぶられることがある。

### 3) 子どもに同情的になり過剰サービスする

ある中学生女子は、友人関係のトラブルから学校に行けなくなり、ほとんど毎日家の中で過ごしていた。友だちと交流することが全くない中で、訪問者と週1回会っておしゃべりができることを楽しみにしていた。訪問者は、こうした子どもの姿を目の当たりにして、訪問者自身が中学時代に友人関係で悩んだ経験を思い出し、孤独な中で過ごしている子どものことを思って悲しくなったり虚しくなったりした。そして、この寂しい状況から何とかして救い出してあげたい気持ちになって、元気づけるような関わりをしてあげた。このように、訪問者は、子どもに同情的になり、子どもの欲求を何でも受け入れたいと感じて過剰サービスをしてしまうことがある。

### 4) 達成感も充実感も得られないで無力感を感じる

ある引きこもり傾向の不登校の子どもは、外出することもなく友だちと遊ぶこともなく、自分の部屋で一日中オンラインゲームをして過ごしていた。こうした中で、家族以外の者で唯一会えるのが訪問者だった。子どもは、毎週1回1時間の訪問の度に居間に出てきてゲームの話をしてくれたのだが、数ヶ月が経っても同じようにゲームの話をするばかりで、子どもの現状は何も変わらなかった。このような状況が続くと訪問者は、達成感も充実感も得られず、訪問の意味が分からなくなり、無力感を感じることもある。

### 5) 一歩踏み込むのは怖い

最初は緊張して大人しかった子どもが、訪問者と継続的に関わる中で次第に笑顔が見られるようになり元気になっていった。ところが、子どもの様子が変わってきて、命令的になったり自分勝手に振る舞うようになってきた。訪問者は、一緒に楽しめない気持ちになったが、嫌な気持ちを見せてはいけないと思って無理に自分を抑え込んでいた。しかし、訪問者は、子ども自身が自分の言動に気づくことは意味があると考え、思い切って「命令的な言葉は、聞いていてあまりいい気持ちがないよ」と率直に伝えた。すると、子どもは自分のあり方を振り返り、日常生活で不満を感じていることや不安に思っていることを打ち明けてくれた。

訪問者も子どもも、今ここで自分がどう感じているのか、本音を語ることは勇気が必要である。とりわけ、否定的な内容を表明することには抵抗があるだろう。相手を悲しませたり傷つけたりはしないか、自分のことを悪く思われはしないかなどと不安になるからである。相



手の心に一步踏み込むのは怖いことであるが、得られることも多い。怖いからといって回避し続けるわけにはいかない。訪問者も子どもも一步踏み込む勇気をもって交流していくことが大切である。

### 3. 訪問の構造に関する悩み

訪問の構造とは、訪問を実施する際の枠組みのことであり、具体的には訪問の時間と場所、活動内容、訪問者の役割等である。訪問の構造は、相談室面接の構造と比べてゆるやかで曖昧な性質がある。福盛・村山(1993)は、訪問の場合、内的な「枠」に頼ることが多いため、訪問者自身がしっかりとした枠組みをもっている必要性があることを指摘している。そこで訪問者は、以下に提示するような訪問の構造について考慮しておかねばならない。

#### 1) 時間が守られにくい

面接時間については、相談室面接の場合はカウンセラーの主導によって守られやすいが、訪問の場合は相手の事情に合わせなければならないことがあって守られにくいことがある。たとえば、家族が訪問者を見送りに来られてご挨拶をしていると時間が過ぎることがある。

#### 2) 外出をしてもよいのか

訪問は、基本的には家の中で活動を行うが、子どもの希望を受けて外出することもある。子どもと一緒に映画を見に行きたいとかプリクラを撮りに行きたいとか言ってくることもある。こうした外出の要望が出されると訪問者はどう対応すればよいのか悩む。まずは子どもの希望をしっかりと聞いた上で、外出については家族や関係者に相談しなければならないことを説明するとよい。外出は、家族や関係機関の了承をもらった上で、安全面に十分に配慮して行われなければならない。ひきこもり傾向の子どもが外出を希望することは大きな進展なので、できるだけ実現させてあげたい。外出によって、子どもと訪問者の関係性が発展したり、子どもが意欲的になったりなどの効果が認められている。倉島・土志田・河野・倉本(1997)は、訪問者に外出経験を尋ねたところ、「外出あり」47名(56.6%)、「外出なし」34名(41%)だった。食事、買物、散歩、スポーツ、学校見学、映画など、子どもの興味・関心を広げていく関わりが行われていた。

#### 3) 家族との関係のもち方はどうすればよいのか

訪問者は子どもと家族の間の葛藤に巻き込まれることがある。訪問者は、子どもの寂しい気持ちや不満を聞いて同情的になり、親に対して批判的になったりする。反対に、訪問者は、親の心配や焦りを聞いて同情的になり、子どもに対して登校や勉強を促したり本音を引き出そうとしたりする。こうして訪問者は、子どもと親の板挟みで身動きが取れなくなることがある。また、きょうだい

いると、きょうだいと一緒に遊びたがったり邪魔してきたりして対応に困ることがある。一方で、家族の介入が役立つこともある。子どもの不安が強いため訪問者と一対一で過ごすことに抵抗がある場合、親やきょうだいを交えることによって子どもが安心して楽しく活動できるようなことがある。たとえば、訪問者と家族がトランプをして盛り上がるなどがある。このように訪問者の存在が触媒となって家族の雰囲気に変化することもある。

#### 4) 関係者に子どもの様子をどこまで伝えるのか

訪問者は、関係機関や学校に対して訪問の状況を報告しなければならないが、こうしたとき守秘義務と報告義務の葛藤を感じることもある。子どもが誰にも言わないでほしいという話は原則として秘密を守るのであるが、子どもの安全が脅かされる可能性がある場合には関係者への報告が必要なこともある。このようなときは、子どもに理由を説明し了承を得た上で関係者に報告することになる。ただし、重大性と緊急性があれば、子どもの了承が得られなくても報告しなければならない。

#### 5) 活動内容がマンネリ化している

毎回の訪問でゲームの話をするだけのワンパターンな活動が何ヶ月も続くことがある。訪問者が別の話題に切り替えようと試みても、いつものゲームの話題に戻ってしまう。このように活動がマンネリ化するのは、子どもが強迫的、抑うつ的、防衛的であることが関係している。一方、訪問者は、マンネリ化した状況に意味があるのかと疑問を感じながらも、対応法が分からないで現状維持を続けている。このような膠着状態を抜け出すためには、子どもの発達特性やパーソナリティ特性に応じた様々な工夫が必要とされるのだが、訪問者は子どもの心に一步踏み込むことを躊躇している。ところが、あるケースでは、年度末の最終回になって、子どもが「長い間一緒にゲームをしてもらってありがとう。楽しかった」と初めて素直な気持ちを表現してくれた。訪問者はこれまでの努力や忍耐が報われるような気持ちになり感激した。人を警戒し不信感を感じている孤立・孤独な子どもにとっては、いつまでも待ってくれる静かで温かな存在、とことん付き合ってくれる存在が必要だったのだろう。

#### 6) 品物をもらってもよいのかどうか

家族からのお茶等の接待や儀礼的な贈り物は辞退するのが原則である。ただし、親から「子どもと一緒に食べてください」とお菓子を勧められた時など、子どもと一緒に同じ物を食べることは共有経験として意味があると考え、柔軟に対応する。また、家庭菜園の野菜、地域の産物など家族の気持ちが込められた品を渡されることがある。訪問者は「お気遣いをありがとうございます。でも、いただいてはいけないことになっていますので、すみません」などと言って辞退すべきところだが、状況に



よっては柔軟に対応することもある。また、子どもが修学旅行に行って訪問者にお土産を買ってきた場合など、子どもの気持ちや体験を共有する意味で受け取った方がよいこともある。以上のように、品物をもらってもよいのかどうか明確に述べることは難しく、臨機応変な対応が必要になる。こうしたとき成田（2003）の著書『贈り物の心理学』が参考になる。

## V. 訪問者の経験と成長

これまでのところで、訪問者の心理発達の役割の基本的要因について、また訪問者の課題（悩み）について述べた。そこで最後に、訪問者の経験と成長という視点で、訪問者はどのような学び・気づきを得るのか、また訪問者自身はどのように成長するのかについて検討する。加えて、訪問者に対する研修とスーパーヴィジョンの必要性について述べる。

### 1. 訪問者の学び・気づき

訪問者が訪問活動を通して得られる学び・気づきは、〈子ども理解〉〈自己理解〉〈関係性理解〉の3つに分類される。〈子ども理解〉とは、不登校の子どもの実態や心理についての理解である。〈自己理解〉とは、不登校の子どもと関わっている自分の性格や態度についての理解である。〈関係性理解〉とは、不登校の子どもと訪問者との相互作用についての理解である。これら3つの学び・気づきは、先行研究ではどのように示されているのだろうか。

倉島ら（1997）では、訪問者78人に訪問者の変化について質問したところ、「とてもプラス方向に変化」20人（25.6%）、「少しプラス方向に変化」49人（62.8%）、合わせると約88%の者が肯定的な変化を感じていた。具体的な回答を見ると、「子どもとの関わり方、接し方を学んだ」「不登校、引きこもりのことについてより深く知ることができた」等があった。これは〈子ども理解〉に相当する。また、「自分のことを振り返る機会になった」「価値観の相違を知り、視野が広がった」等があった。これは〈自己理解〉に相当する。大原・長岡・水野・丸山・吉田（1997）では、訪問者10人に活動を通して学んだことを調査したところ、「模範的ないい人であろうとするよりも、自分らしくいられるようにリラックスして相手に接した方がいいと思うようになった」「私が心を開いて接すれば、相手もだんだんと心を開いてくるのだと知った」等の回答があった。これは〈関係性理解〉に相当する。酒井・伊藤（2001）では、訪問者152人（質問紙調査の自由記述）及び訪問者10人（面接調査）の回答をまとめたところ、訪問活動から得られた経験は3つに分類された。一つ目は、子どもと関わって感動した

とか子どもへの見方が変わったという子ども理解の深まりだった。これは〈子ども理解〉に相当する。二つ目は、「人との接し方について考える機会になった」「自分がどんな性格なのか、子どもから気づかされた」「自分のものの見方、考え方を捉え直すきっかけとなった」等、自分自身を深く見つめるようになったことであった。これは〈自己理解〉に相当する。三つ目は、「子どもを見ると、自分の悩みと同じだと思うことがあった。子どもは悩みを表に出しているが、自分は心の中に深くしまいこんでいることに気づいた」等、訪問者は子どもとの相互作用を通しての理解を示していた。これは〈関係性理解〉に相当する。

以上のように、訪問者の学び・気づきは、〈子ども理解〉〈自己理解〉〈関係性理解〉の3つに大別される。子どもを理解することに専念することによって、自分自身への気づきが起これり、そして我と汝の関係性への理解へとつながっていくのである。

### 2. 訪問者自身の成長

訪問者は、訪問活動の経験からどのように成長するのだろうか。訪問者の成長は、〈自分自身の心理的な成長〉〈専門的な事柄への関心の高まり〉〈心理臨床への動機づけ〉の3つに分類される。

伊藤（2001）では、メンタルフレンドの変化尺度において成長、関心の高まり、臨床志向の3因子（14項目）が抽出された。成長因子には、「自分も子どもに支えられていると思った」「自分の新たな一面に気づいた」等の項目があった。これは〈自分自身の心理的な成長〉のことである。関心の高まり因子には、「子ども一般への関心が高まった」「カウンセリングへの関心が高まった」等の項目があった。これは〈専門的な事柄への関心の高まり〉のことである。臨床志向因子は、「子どもに必要とされていると感じられるようになった」「メンタルフレンド活動は心理治療に役立つと思った」等の項目があった。これは〈心理臨床への動機づけ〉のことである。

訪問者は、不登校の子どもとの交流を通して、自分自身の心理的な成長を感じたり、専門的な事柄への関心を高めたり、心理臨床への動機づけをもつようになったりした。もちろん訪問臨床活動は訪問者の成長をねらいとしているのではないが、結果的に、訪問者は子どもとの交流を通して様々な側面で成長していた。

こうした成長を遂げるのは、訪問者が大学院に入学し心理臨床を志したばかりの臨床経験の少ないナイーブな性質をもつ時期、つまり敏感期にあるからではなかろうか。こうした訪問者にとって、ひきこもり傾向の不登校の子どもとの直接交流、しかも相談室外での「半常的交流」（日常と非日常の間における交流）はインパクトのある経験となった。訪問者である大学院生が自分自身

をみつめ、専門性への関心を高め、心理臨床への動機づけをもつことは、心理支援者の成長過程における初期経験として大変重要である。

### 3. 訪問者に対する研修とスーパーヴィジョンの必要性

訪問者をサポートする研修とスーパーヴィジョンは必要不可欠である。伊藤（2001）は、引きこもり傾向の不登校の子どもと関わる訪問者が安心して活動し、その経験を通して成長するためには、専門家が研修とスーパーヴィジョンにより具体的かつ実践的な支援を行うことが必要であると述べている。また、山下・武内・高野（2014）は、事例検討やスーパーヴィジョンは子どもや保護者への理解が深まるとともに、訪問者の対応を振り返り、今後のよりよい対応につなげていくことができると述べている。そして、訪問者が失敗した例から学ぶことは活動への具体的なイメージを抱くことができ、注意すべき点を確認できるので意義があると指摘している。

本大学院の研修には、訪問者登録説明会（年1回）、訪問臨床事例検討会（1回90分、年4回）、連絡協議会（関係機関・学校・訪問者の三者、年1回）がある。訪問者（大学院生）へのスーパーヴィジョンについては、大学教員のスーパーバイザーが実習指導の一環として定期的実施している。このような研修とスーパーヴィジョンを通して、訪問者は、訪問の仕方や留意点、子どもへの理解と対応、訪問者自身の成長と課題などについて理解を深めている。同時に、訪問者は、大学院生仲間から理解され情緒的に支えられることも経験している。

初めて訪問ケースを担当した院生にとって、引きこもり傾向の不登校の子どもを訪問して直接交流するという経験は稀な経験であり、衝撃的な出来事である。そのため訪問者は、「自分が何とかしてこの子どもを救ってあげたい」という気持ちを感じるものである。その思い入れが強いほど、嫌われたくないとか諦めたくないという気持ちも強く感じる。研修とスーパーヴィジョンの中では、初心の訪問者が陥りやすい感情、つまり万能感、無力感、見捨てられ不安、傷つきの回避について気づきを深めていくのである。また、家庭に入りその家族と出会うことによって、訪問者自身の家族との経験が呼び起こされるため、逆転移が生じやすいことも認識しておかねばならない。なお、訪問者による対応が困難だったケースや、訪問が中断になったケースなどについて検討し、大学院生である訪問者が関わることの限界についても考えておくことが必要である。

以上のような訪問者をサポートする研修とスーパーヴィジョンが、訪問者が安心して訪問活動を実施することを助け、そして子どもを支えることにつながるのである。

## VI. おわりに

本論文では、不登校の訪問臨床における訪問者の役割と課題について述べた。訪問者には多様な役割があるが、最も重要なのは訪問者の心理発達の役割であり、その基本的要因として8つを提示した。また、訪問者が抱えている課題（悩み）には、役割上の悩み、心理面の悩み、訪問の構造に関する悩みがあることを示した。

今後の課題としては、訪問臨床の構造、訪問臨床の過程、訪問臨床の効果、等に関する研究が求められている。

## 文献

- 福盛英明・村山正治（1993）. 不登校児の訪問面接事例からの一考察—「家庭教師の治療者」という視点から. 九州大学教育学部紀要（教育心理学部門）, 38（2）, 133 - 141.
- 乾吉佑（2009）. 思春期・青年期の精神分析的アプローチ—出会いと心理臨床. 遠見書房.
- 伊藤美奈子（1999）. 児童相談所を対象としたメンタルフレンド活動に関する実態調査. 「健康文化」研究助成論文集, 5, 20 - 27.
- 伊藤美奈子（2001）. メンタルフレンド事業に関する実態調査—メンタルフレンド活動の実際と、その成長と悩み. お茶の水女子大学人文科学紀要, 54, 277 - 289.
- Kohut, H. (1984). How does analysis cure? The University of Chicago Press. 本城秀次・笠原嘉（監訳）, 幸順子・緒賀聡・吉井健治・渡邊ちはる（共訳）（1995）. 自己の治療. みすず書房.
- 倉島徹・土志田隆・河野治子・倉本英彦（1997）. 相談的家庭教師派遣活動の実際. 研究助成論文集（安田生命社会事業団）, 33, 211 - 214.
- 倉島徹（1999）. 家庭教師・メンタルフレンドによる訪問アプローチ（思春期挫折とその克服）. 現代のエスプリ, 388, 144 - 151.
- 村瀬嘉代子（1979）. 児童の心理療法における治療的家庭教師の役割について. 大正大学カウンセリング研究所紀要, 2, 18 - 30.
- 成田善弘（2003）. 贈り物の心理学. 名古屋大学出版会.
- 緒方明・川口久雄・小松哉子（1994）. 不登校への家庭教師による治療的接近. 熊本大学教育学部紀要人文科学, 43, 169 - 176.
- 大原英子・長岡利貞・水野信義・丸山紀子・吉田洋子（1997）. 地域におけるメンタルフレンド活動の導入. 研究助成論文集（安田生命社会事業団）, 33, 203 - 206.
- 岡野憲一郎（2008）. 治療的柔構造—心理療法の諸理論

- と実践との架け橋. 岩崎学術出版社.
- 酒井朗・伊藤茂樹 (2001). 不登校児のケアにおけるボランティア活動の社会的意味—児童相談所におけるメンタルフレンド活動を中心に. お茶の水女子大学人文科学紀要, 54, 159 - 176.
- Sullivan, H.S. (1953). *The Interpersonal Theory of Psychiatry*. 中井久夫・宮崎隆吉・高木敬三・鑑幹八郎 (訳) (1990). 精神医学は対人関係論である. みすず書房.
- 田嶋誠一 (2001). 不登校・引きこもり生徒への家庭訪問の実際と留意点. 臨床心理学, 1(2), 202 - 214.
- 武井明・富樫悦子・長野正稔 (1999). 不登校児に対するメンタルフレンド訪問援助—治療成績および追跡調査の結果から. こころの健康, 14(1), 71 - 78.
- 山下拓郎・武内珠美・高野啓子 (2014). 訪問相談員による不登校の子どもへの支援に関する研究—意欲の高まり, 活動性や対人関係の広がり—に焦点をあてて. 大分大学教育福祉科学部附属教育実践総合センター紀要, 32, 49 - 64.
- 吉井健治 (2013). 不登校の訪問臨床—訪問者との対面が困難な「面壁ケース」の検討. 鳴門教育大学研究紀要, 28, 1 - 9.
- 吉井健治 (2014). 不登校の訪問臨床—自己と対象のシンメトリーの経験の意義. めんたる・へるす (徳島県精神保健福祉協会), 63, 15 - 19.
- 吉井健治 (2016). 不登校の訪問臨床—不登校の子どもへの訪問十二の技. 鳴門教育大学研究紀要, 31, 29 - 35.
- 吉井健治 (2020). 不登校の訪問臨床における子どもと訪問者の関係性—チャム的関わりの意義. 鳴門教育大学研究紀要, 35, 14 - 22.